

熊野牛複合経営農家への総合支援指導について（第3報）

紀南家畜保健衛生所
○筒井視有 平井伸明
伊丹哲哉

【背景および目的】

管内熊野牛複合農家において、平成20年に肥育牛を導入後、呼吸器病・消化器病が蔓延したことを契機に、衛生対策、飼料給与法や人工授精技術など総合的な指導を実施した。これまでの指導により、疾病数の低減、母牛の栄養状態や繁殖成績の改善などが認められたが、一部の呼吸器病において、ワクチン接種後もウイルス抗体価が上昇しないという課題が残っていた。本年度はこの課題を解決するため、呼吸器病5種混不活化ワクチンを活用したワクチンプログラムを試行したところ、良好な結果が得られた。また、これまでの指導により子牛出荷成績の改善や経営者の成長などが認められたので併せて報告する。

【方法】

従来のワクチンプログラム（子牛への5種混生ワクチン2回接種）使用群を対照区、新たなワクチンプログラム（母牛への呼吸器病5種混不活化ワクチン接種）使用群をワクチン区とした（図1）。ワクチンの効果については、分娩後1ヶ月の母牛及び出生後1ヶ月の子牛血清を用い、各疾病の抗体価により評価した。また、これまでの指導による効果を評価するため、診療延べ頭数および家畜市場成績を調査した。

【結果】

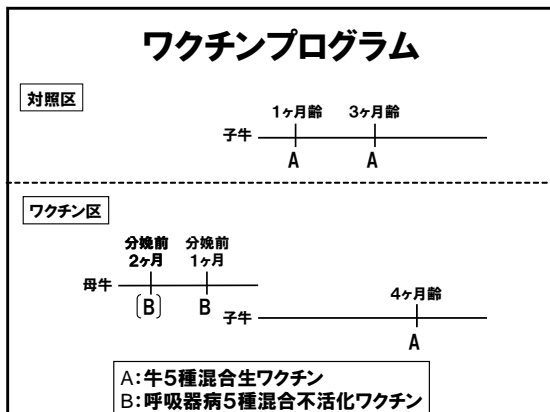
PI3及びRS抗体価は、対照区・ワクチン区ともに高い値を示し、有意差は認められなかった（図2）。IBR及びBVD-MD I・II抗体価は、対照区ではほとんど上昇が認められず、ワクチン区が有意に高い値を示した（図3）。疾病の発生状況については、平成20年の疾病の蔓延以降大きな発生は認められず、平成22年の肥育牛導入後も大きな発生は認められなかった（図4,5）。平成20年の肥育牛導入以降、市場平均より低く推移していた家畜市場成績は、平成22年より市場平均並に回復した（図6,7）。

【考察】

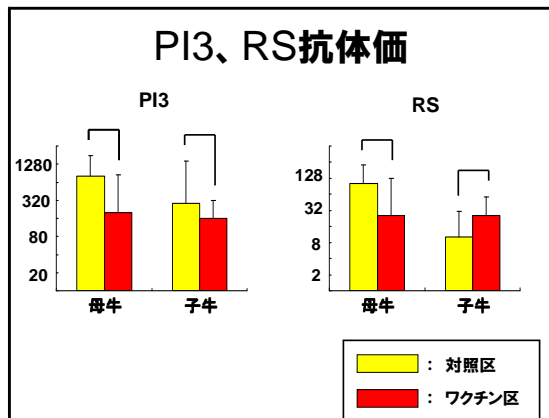
今回試行した新しいワクチンプログラムでは、生後1ヶ月の子牛においても高い抗体価を示すことが確認された。ワクチン接種コストも従来法より新法のほうが安価であった。また、これまでの継続した指導の結果、疾病数の低減や市場成績の改善が認められ、本年の新たな肥育牛導入後も疾病の増加や市場成績の低下は認められなかった。また、当該農家の意識も向上し、現在は熊野牛産地化推進協議会の副会長を務めるなど、若手農家から中核農家としての成長

も認められる。今後は、新しいワクチンプログラムによる効果を引き続き検証していくとともに、中核農家としての位置づけを定着し、他の熊野牛農家のモデルとなるよう指導してまいりたい。

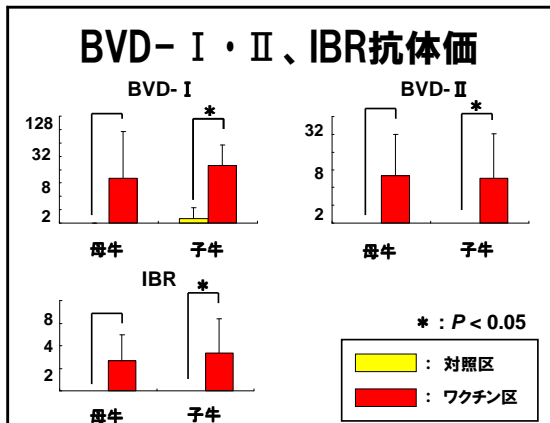
(図 1)



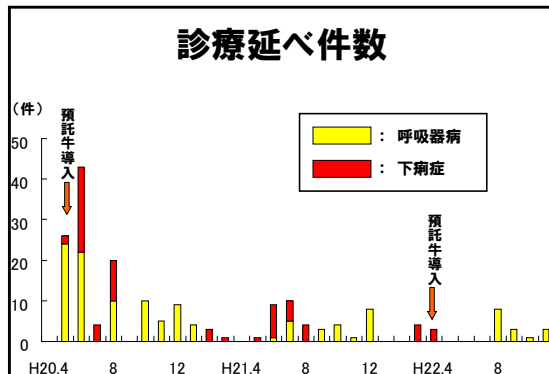
(図 2)



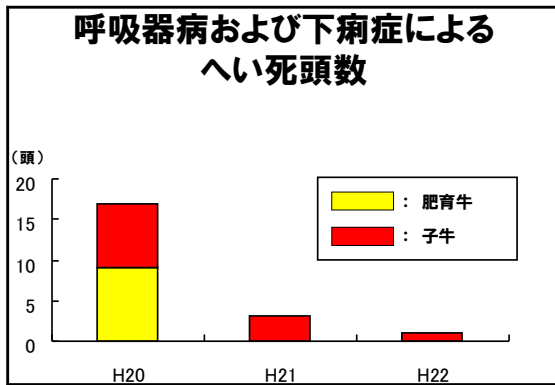
(図 3)



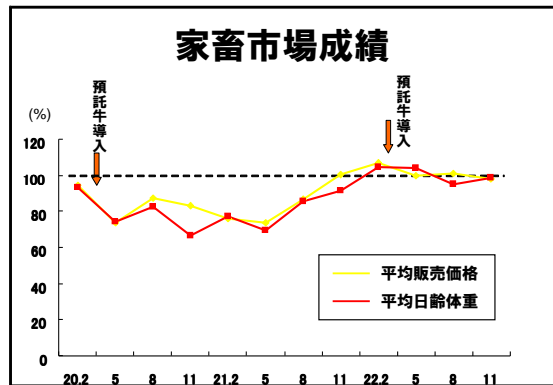
(図 4)



(図 5)



(図 6)



(図 7)

